

説教題 「内緒話でない信仰」

聖書箇所 マタイによる福音書 10 章 26 節— 31 節

マタイ 10:26 「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである。

マタイ 10:27 わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。

マタイ 10:28 体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。

マタイ 10:29 二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。

マタイ 10:30 あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。

マタイ 10:31 だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

4年ほど前にこんなニュースがありました。「17世紀の日本人殉教者188人が聖人に次ぐ『福者』に(2007年 3月 4日(日))というタイトルで、曰く、「在バチカンの外交筋によると、法王庁列聖省の枢機卿会議はこのほど17世紀前半の日本人188人の殉教者を『福者』とすることを了承した。最終的には4月の復活祭の前後にローマ法王ベネディクト16世が裁可を下し、正式決定すると見られる。カトリックでは福者は聖人に次ぐ尊崇の対象。188人は激的なキリシタン弾圧が行われた江戸時代初期の全国の殉教者で、一般信徒がほとんど。女性や子供も多い。」

そして、この列福のために日本のカトリックの人々は、「殉教者を想い、ともに祈る週間」というようなキャンペーン活動を去年から続けていました。その呼びかけ文に曰く、「以下のようなことを念頭において『188殉教者』を取り上げることにしました。日本国内に殉教者たちについて幅広く告知知らせ、殉教者が偉人であるということだけでなく、現代が抱える様々な問題にどのような示唆を与えているかに焦点を当てます。」

では列福された殉教者たちは、問題に満ちた現代を生きる私たちにどんな示唆を与えてくれているのでしょうか。それはまさに本日の聖書の箇所イエス・キリストが示しておられるような示唆を与えてくれているのではないのでしょうか。マタイによる福音書 10 章 28 節に曰く、

「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」

殉教者たちの有様は、死ぬことに意味があると訴えているのではないでしょう。そうではなくて、イエスをキリストと告白することの意味を、命を懸けて訴えているのではないでしょう。その心は星野富弘さんのあの有名な詩にも通じるでしょう。『花の詩画集～鈴の鳴る道』という本に入っている詩です。

命が

いちばんだと思っていたころ

生きるのが苦しかった

いのちより

大切なものが

あると知った日

生きているのが

嬉しかった

星野さんは、まさに「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れ」なくなると、告白しておられるのです。

さて、これから童謡を歌います。もちろん、賢明な皆さんはもうお分かりでしょう。私はあの童謡を正しく歌う自身がありません。楽譜も手元にありません。皆さん、教えてください。一緒に歌ってください。結城よしを作詞・山口保治作曲の「ないしよ話」という童謡です。

「ないしよ ないしよ

ないしょの話は あのねのね
にこにこ にっこり ね 母ちゃん
お耳へ こっそり あのねのね
坊(ぼう)やの おねがい きいてよね

私たちはこの坊やのように、信仰を「ないしょ」にしていけないでしょうか。悪い意味で、隠れキリシタンになっていないでしょうか。この世の利益を、イエス・キリストを告白することよりも優先していないでしょうか。

ところで、この「ないしょ」という言葉について玄侑宗久(げんゆうそうきゅう)という臨済宗のお坊さんがかつて中央公論という雑誌の中で面白いことを書いていましたので、ご紹介します。玄侑さんは、こうおっしゃいます。

「本来『ないしょ』というのは、『内証』という密教用語が変化した言葉で、『内緒』や『内所』というのは当て字である。他者が知り得ない『さとり』の世界を、秘密といい、内証といった。なぜ知り得ないのか。それは、言葉で表現できないからである。」

このように玄侑さんによれば、仏教の信仰は「内証」ごとです。この点が、イエス・キリストのおっしゃる信仰と決定的に違います。イエス・キリストは信仰は内証だとはおっしゃいません。イエス・キリストは本日の箇所(ルカ)の 26 節で、次のようにおっしゃっていました。「覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである。」

このように、イエス・キリストのおっしゃる信仰は「内証」ごとではありません。イエス・キリストは 27 節で、こうもおっしゃっています。

「わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。」

これも、もう5年ほど前になりますが、森進一は「おふくをさん」を歌うなどその歌の作詞者から言われたことがありました。それで、嘉穂劇場へ行っても森進一の「おふくろさん」は聞けなかったそうです。だから、当時家で私が歌ってやりました。

「おふくろさん」(川内康範作詞・猪俣公章作曲)

おふくろさんよ おふくろさん
空を見上げりゃ 空にある
雨の降る日は 傘になり
お前もいつかは 世の中の
傘になれよと 教えてくれた
あなたの あなたの真実
忘れはしない

それで、家族から聞きたくないから歌うなど言われました。歌手は歌を歌ってこそ歌手です。歌を歌ってはならないといわれたら、歌手は歌手でなくなります。お金が入らないから大変というより、歌えない歌手は生ける屍です。私たちは森進一とは違いますが、似たところもあります。もし私達がクリスチャンであるなら、クリスチャンはイエス・キリストをたたえる歌を、屋根の上で大きな声で歌えといわれた歌手みたいなものです。イエス・キリストを告白し、イエス・キリストをたたえる歌を歌うことがクリスチャンの生きがいです。私たちは歌を忘れたカナリヤのようなクリスチャンになっていないでしょうか。

歌を忘れたカナリアは後ろの山に棄てましょか

いえいえ それはかわいそう

歌を忘れたカナリアは背戸の小藪に埋けましょか

いえいえ それはなりませぬ

歌を忘れたカナリアは柳の鞭でぶちましょか

いえいえ それはかわいそう

歌を忘れたカナリアは象牙の舟に銀のかい

月夜の海に浮かべれば 忘れた歌を思い出す

もしも、私たちが、今、「歌を忘れたカナリヤ」のような「内緒話の信仰者」になっているなら、「月夜の海に浮かべてもらって」、忘れた歌を思い出しましょう。

信仰を告白する日々は、この世に比べるものがないすばらしい日々です。それは、伊藤

仁齋の弟子であった京都の町衆の見出した境地にも通じるものがあります。これは「講談社文芸文庫」の『小林秀雄対談集』にある話です。文芸評論家の小林秀雄はプラトンの研究者だった田中美知太郎との対談で次のように言うのです。

「伊藤仁齋の弟子であった町衆は、道楽という道楽はしつくして、学問が最後の道楽になったとも思えるんですね。（伊藤）仁齋先生のところへゆけば人生がわかる。暮らしている意味がわかる。これは酒や女よりもおもしろい」

この金持ち連中は、この世の面白いことは金にあかしてすべてやりつくした人々でした。ただ一つしていないのが学問でした。それで、料亭に伊藤仁齋先生を招いて講義をしてもらい、それをご馳走を食べながら聞いたというのです。そしたら、それが今までしたどんな道楽よりも面白かったというのです。もちろん、イエス・キリストを信じて告白する生活は、伊藤仁齋の弟子であった町衆の生活とは違います。しかし、この世の中にこれ以上のものがないということを見出すという点では通じるものがあります。イエス・キリストに出会い、イエス・キリストに「命よりも大切なものがあるということを」、そっと「暗闇で耳打ち」していただけるなどということは、もはやこの上のないすばらしいことです。どんな道楽もこれにはかきません。内緒話にせず、この道楽を堂々と教会の外にも、すなわち私たちのウイークデーの社会の現場にも持ち出しましょう。

<祈り>

神様、イエス・キリストを歌を歌うように楽しく告白する生活を、私たちに堂々と為させてください。この祈り、主イエス・キリストのみ名によって御前におささげ致します。アーメン。